卒業研究論文

現代の子どもの名前

――読みにくさの原因はどこにあるのか――

古　川　達　也*

（大槻ゼミ）

キーワード：子どもの名前、読みにくさ、漢字の音訓、省略、添え字

はじめに

筆者は現在、大阪市阿倍野区の小学校で特別支援ボランティアとして働いている。そこで、あまり聞いたことがない名前の子どもがいたり、漢字だけでは読み方が分からなかった子どもがいたりして名前の多種多様さに興味をもった。

どうしてこのように、音の響きが珍しかったり、読みにくかったりする名前が多いのだろう。漢字の読みは、常用漢字表に載っているものならほとんど知っているはずなのに、なぜ名前に読みにくさを感じるのだろうか。その原因は、漢字とその読み方に普通ではないような読み方がされているからではないだろうか。そこから、珍しい響きをもつ名前はどんな漢字を使っているのだろうか、読み方が難しい名前は漢字をどのように読ませているのだろうかという疑問が湧いてきた。

本論の目的は、なぜこのように、子どもたちの名前の一部に読みにくいものがあるのか、その原因をみつけることにある。

調査対象は、筆者が働いている大阪市内の小学校の女子の名前である。近年の、読みにくい名前には「『当て字』的な文字使用が多く見られる。この傾向は女児の名付けに顕著である」（徳田2004）という指摘があることと、筆者の経験からも、女子の名前に読みにくいものが多かったという印象があったからである。また、今回の調査では、名前が二文字のものに限定し、その漢字の読み方の種類やその組み合わせについて考察した。その結果、調査人数は278名となった。

ところで、漢字が奈良時代より以前に日本に入ってきて以来、我々の祖先は、漢字をどのように読んできたのだろうか。日本語そのものを大量に漢字を用いて表した最初は、万葉集である。そこで、万葉集に見られる漢字の用法をまとめたもの（稲岡耕二1979「万葉集用字」）を参考に、漢字の読み方を、筆者なりにまとめなおしてみた。それが、次の一覧である。なお、「正訓・正音」などの術語は稲岡氏のものを利用した。

1　漢字を音読みしたもの

〈正音〉阿（あ）・伊（い）・宇（う）／南（なむ）・念（ねむ）

〈略音〉安（あ）・吉（き）

2　漢字を訓読みしたもの

一字一訓

〈正訓〉吾（われ）・君（きみ）・秋（あき）・月（つき）・来（くる）・去（さる）

〈義訓〉暖（はる）・寒（ふゆ）・疑（らむ）

〈略訓〉市（ち）・跡（と）・常（と）

二字（以上）一訓

*平成24年度卒業生

〈正訓〉年魚（あゆ）・芽子（はぎ）・白水郎（あま）・辛苦（くるし）

〈義訓〉丸雪（あられ）・未通女（をとめ）

以上は、万葉集に見られる例なので、現代日本語に見られる例を挙げながら、一つずつ説明しておく。

正訓……「夏」を（なつ）、音を（ね）と読むように、漢字の訓読みを略さず正しく読むもの。

例）「夏音」（なつね）

略訓……漢字の訓読みの一部の音だけを使って読むもの。

例）「華望」（かの）

この場合、「望」の訓読み（のぞ・む）は（の）だけを用いている。

義訓……訓読みではあるが、漢字そのものの意味はなくその漢字からイメージする言葉・意味的に関連する言葉で読むもの。特に二字以上の漢字に訓を当てている場合を熟字訓という。

例）「温」（はる）「吹雪」（ふぶき）

正音……「安」をアン、「奈」をナと読むように、漢字の音読みを略さず読むもの。

例）「安奈」（アンナ）

略音……漢字の音読みの一部の響きだけを使って読むもの。

例）「奈央」（なオ）

「央」の漢字音（オウ）の（オ）だけを用いている。

以上の漢字の読み方に従って、278名の二字名を分類したところ、次のような結果となった。数字は異なり数。（　）に示した数字は延べ数である。

後項＼前項	正音	正訓	略音	略訓	義訓
正音	50(51)	29(32)	10	18	1
正訓	42(46)	46(54)	6	5(6)	2
略音	7	7	2	3	1
略訓	7(9)	9(10)	1	4	2
義訓		1			

＊この表に入らないものとしては、分類不能の「向葵（あおい）」「咲季（さり）」「優咲（ゆら）」3例と、熟字訓の「日和（ひより）」「吹雪（ふぶき）」の2例がある。

表の見方は、例えば「正音（前項）＋正音（後項）」となる名前は、表記や読み方が全く同じものが2例あったため、用例数としては51、名前は50種類あったことを示している。

次に、以上の各分類ごとに具体的な名前を掲載し、読みのむずかしさを中心に説明を加えていくことにする。その際、漢字音はカタカナで、訓はひらがなで記した。

漢字の音訓からみた名前の読み方

1. 正音＋正音　50（51）

愛加	愛梨	愛理	亜美	安那	安奈	一花	恵理	愛里	恵凛
アイカ	アイリ	アイリ	アミ	アンナ	アンナ	イチカ	エリ	エリ	エリン
雅恵	佳奈	花音	花歩	果歩	佳凛	久美	桂花	恵都	紗衣
カエ	カナ	カノン	カホ	カホ	カリン	クミ	ケイカ	ケイト	サエ
紗希	沙耶	沙羅	紗良	樹々	寿里	奈々	風夏	麻衣	麻椰
サキ	サヤ	サラ	サラ	ジュジュ	ジュリ	ナナ	フウカ	マイ	マヤ
美希	未稀	美沙	柚衣	由依	唯華	裕佳	優雅	優希	優那
ミキ	ミキ	ミサ	ユイ	ユイ	ユイカ	ユウカ	ユウカ	ユウキ	ユウナ
優奈	悠未	侑里	莉沙	莉世	理那	里奈	涼花	梨華	瑠那
ユウナ	ユウミ	ユウリ	リサ	リセ	リナ	リナ	リョウカ	リンカ	ルナ

「正音＋正音」の組み合わせのものを一覧にした。一覧表を見ればわかるが、読み間違うものは少ない。読みにくさが問題になるのは次の3つくらいだろう。

まず「雅恵（カエ）」「優雅（ユウカ）」。これは常用漢字表の音訓表では（以下、常用漢字表に載っている音は「常音」。訓は「常訓」と略称する。）（ガ）と読むので（カ）と清音で読ませているのは若干の読みにくさを感じる。この読み方は正音とは言えないかもしれないが、中国音はもともと清濁の区別はないので「雅（カ）」についても、正音として処理した。

次に「花音（カノン）」の「音」だが（ノン）と読む。これは、「観音」を（カンノン）と読む現象を利用したものと考えられる。「観音（カンノン）」は、連声[1]によって生じた読み方で、本来の字音ではないが、前の「n（ン）」の音に引きずられて生じた訛音である。ここでは正音として扱うことにした。

このように、①日本語の正音からやや離れるもの（雅（カ））、②正音の訛によって生じた音（音（ノン））、③正音と正音の間に読み添え音を添える（梨華（リンカ））ものが読みにくいものであった。

2. 正音＋正訓　42（46）

愛子	愛菜	杏菜	伊織	育代	一葉	花帆	寛菜	沙彩	紗世
アイこ	アイな	アンな	イおり	イクよ	イチは	カほ	カンな	サあや	サよ
詩香	詩織	朱乃	泰子	智夏	智帆	奈摘	妃菜	風香	楓実
シイか	シおり	ジュの	タイこ	チなつ	チほ	ナつみ	ヒな	フウか	フウみ
茉子	美緒	美琴	美咲	美月	美波	美春	優香	友香	侑子
マこ	ミお	ミこと	ミさき	ミづき	ミなみ	ミはる	ユウか	ユウか	ユウこ
優羽	由樹	由芽	里江	李香	理子	莉子	理菜	梨乃	鈴音
ユウは	ユき	ユめ	リえ	リか	リこ	リこ	リな	リの	リンね
凛乃	怜子								
リンの	レイこ								

ここに分類したもので読みにくいのは、まず「詩香（シいか）」ではないだろうか。「詩」と「香」では読みに（い）は出てこない。しかし、「詩歌」を（シいか）と読むことが慣用としてあるので、それに倣ったものと思われる。

また、「鈴」を（リン）と読むのも意外に難しいのではないだろうか。「鈴」は単独では「すず」と読むのが普通で、「リン」という唐音[2]は常用漢字表にも採られておらず、なじみがないように思う。

ここでは、読みにくい理由として、その音が、①通常と異なる慣用音である、②常用漢字表にない、の二点があげられる。

3. 正訓＋正音　29（32）

朱里	彩華	早稀	祥花	幸花	朋花	凪里	夏希	夏輝	虹架
あかリ	あやカ	さキ	さちカ	さちカ	ともカ	なぎリ	なつキ	なつキ	にじカ
虹歩	初美	羽音	春希	優果	真依	真花	愛美	真理	三佳
にじホ	はつミ	はノン	はるキ	ひろカ	まイ	まなカ	まなミ	まリ	みつカ
心優	芽衣	芽依	萌以	桃花	桃奈	結奈	志佳	夢歩	
みユウ	めイ	めイ	めイ	ももカ	ももナ	ゆいナ	ゆきカ	ゆめホ	

優果（ひろカ）の「優」（ひろ）、真花（まなカ）の真（まな）、心優（みユウ）の「心」（み）、萌以（めイ）の「萌」（め）、志佳（ゆきカ）の「志」（ゆき）などが読みにくいものとしてあげられる。これらが読みにくいのは、常訓でないからだろう。これらの訓は名乗りとして漢和辞典には載っている。昔から名前には広く使われてきた読み方である。

そもそも「訓」とは漢字の日本語訳であり、漢字の字義や文脈によっていろいろな語に訳すことができる。それが名前にも使われ今日まで残ってきているのである。

例えば、萌以（めイ）－常用漢字表には「萌」の文字が採られていないので、「萌（め）」と読むのは難しい。ただし漢字の字義には「め・もえる・きざす」などの意味があるので、「め」は正訓である。同じように「優」は常訓では「やさしい・すぐれる」の読みしかないが、字義には「みやび・のびやか・ゆたか」などの意味もあるので「ひろ」という正訓が生じたのだろう。「志」の常訓は「こころざす・こころざし」だが、字義には「心のむかうところ・めあて・しるす」などがある。こころのゆくところという意味から「ゆき」

が生じたと見られる。「心」には「まんなか・中心」という意味もあるので「み（身）」という訓が生じたのだろう。以上は常訓ではないが、漢字そのものが持つ字義から導き出せる正訓である。

「真」を（まな）と読むのは、例えば「真鶴（まなづる）」「真交い（まなかい）」のように、熟語になったときに「真の」という意味で「まな」と読むことがあったところから使われるようになったと推測される。正訓（ま）の一種の訛化と考えられるのである。

羽音（はノン）の「音」を（ノン）と読むのは、連声の結果であることは先に述べた。

読みにくい理由としては、①正訓ではあるが常用漢字表にない訓である、②熟語の場合の読みから生じた訛化の二つがあげられる。

4. 正訓＋正訓　46（54）

和香	朱音	明子	絢香	采奈	彩音	彩乃	綾乃	礼愛	詩乃
あいか	あかね	あきこ	あやか	あやな	あやね	あやの	あやの	あやめ	うたの
乙葉	音羽	風音	一穂	日乃	香穂	琴乃	琴葉	小夏	咲穂
おとは	おとわ	かざね	かずほ	かの	かほ	ことの	ことは	こなつ	さきほ
千里	千寿	千夏	千洋	朋香	夏音	菜弥	音々	葉月	葉山
ちさと	ちとせ	ちなつ	ちひろ	ともか	なつね	なひろ	ねね	はづき	はやま
晴香	晴菜	日菜	陽菜	陽依	紘子	帆香	真帆	実咲	麦穂
はるか	はるな	ひな	ひな	ひより	ひろこ	ほのか	まほ	みさき	むぎほ
桃菜	結香	結子	結子	幸音	善香				
ももな	ゆいか	ゆいこ	ゆうこ	ゆきね	よしか				

この中で読みにくいと思われる名前をとりあげてその理由を見てみよう。

「和香（あいか）」の「和（あい）」、菜弥（なひろ）の「弥（ひろ）」という読み方は名乗り訓にある。「和」の字義に「あえる・まぜあわせる・ほどよくつりあう」、「弥」の字義に「大きい・ゆきわたる・いよいよ」など空間の広さを意味するものがあり、そこから生じた正訓であろう。

音羽（おとわ）の「羽」（わ）は、いわゆるハ行転呼音[3]により「わ」とよむようになったものである。つまり、「羽」（は）が熟語の語尾に来ることになったので、「は」の音が「わ」の音に変わる現象が起こったのである。この現象は平安時代にはすでに存在しており、「音羽（おとわ）」という地名は滋賀・京都・奈良・大阪にもある。同じように熟字での読み方が一字になった場合も残されたものに「幸（ゆき）」がある。これは「御幸」を（みゆき）と読んだところから、「幸」だけでも「ゆき」を読ませたものと考えられる。

帆香（ほのか）の（の）は添音である。

また、「結子」を（ゆうこ）（ゆいこ）とも読むように、活用する語の場合はどの形で読むのかがわかりにくいことがある。

ここでの読みにくい原因は、すでにみてきたものと同様に、①常用漢字表にない訓である、②音の変化が起こった（訛化）、③熟語の場合の読み方を利用、④添音、⑤活用する語の場合どの形で読むかがはっきりしない、などであった。

ここまでは、正音もしくは正訓の中での読みにくさの理由を見てきたが、これ以降は、略音・略訓による読みにくさが出てくる。

5. 正音＋略音　7

奈央	美愛	美空	美裕	美友	莉央	理央
ナオ	ミア	ミク	ミユ	ミユ	リオ	リオ

ここの略音はすべて下略だが、「央（オウ）」や「空（クウ）」、「裕（ユウ）」、「友（ユウ）」など長音の省略であるためそれほど読みづらさを感じない。一方「美愛（ミア）」のように、「愛（アイ）」の（イ）を略すのは読みづらさを感じる。

6. 正音・略訓　7（9）

華望	風薫	未来	美南	莉来	里桜	和奏
カの	フウか	ミく	ミなみ	リこ	リら	ワかな

略訓はいずれもすんなりとは読めない。「華望（カの）」「風薫（フウか）」「和奏（ワかな）」は「のぞむ・かおる・かなでる」など三音節以上の音節の最初の音だけを取りその他を略している。

「里桜（リら）」は「桜」を（ら）と読むが、これは（さくら）の最後の音（ら）の部分を用いて前の部分を略している（「上略」という）。これなどはたいへん読みづらい。

「未来」「莉来」の「来」は（こ）とも（く）とも読む。これらはそれぞれ「こい・くる」の略と考え、ここに分類したが、「来（こ）」は古典語活用の未然形（こ）かもしれない。このように活用のあるものは、活用形のどれで読むのかの決定が難しい。

最後に「美南（ミなみ）」は「美（ミ）」+「南（なみ）（「みなみ」の「み」の省略）」と解釈してここに分類した。また「美（ミ）」は、「南」だけでも（みなみ）と読めるところに、「美」を添えた〈添え字〉と考えられる。

読みにくさの原因をまとめると、①音を略しすぎる、②語の頭を略す（上略）、③活用する場合どの語形で読むかがすぐに決定できない、となる。

7. 正訓＋略音　7

明鈴	菜桜	真愛	真央	眞央	眞優	結愛
あかリ	なオ	まイ	まオ	まオ	まユ	ゆうア

略音も、「央（オウ）」「優（ユウ）」など長音を省略している程度なら、それほど読みづらさは感じないが、「真愛（まイ）」のように、「愛（アイ）」と読むところの（ア）を略して（イ）と読ませるのは、上略なので読みづらさを感じる。「桜（オ）」と読むのは、「央（オ）」と同じく長音の省略だが、この場合は読みにくい。これは「桜」を（オウ）と音読みすることが少ない（常音にはある）－特に名前などではほとんど見ないということと関係していると思われる。

「明鈴（あかリ）」の「鈴（リ）」は（リン）の（ン）の省略と考えてここに分類した。「鈴（リ）」は、「明」だけでも「あかり」と読めるところに「鈴（リ）」を添えた〈添え字〉であると考えられる。ただ「鈴」を（リン）と読むのは、先にも出てきたように（たしかに常音にあり、「風鈴・呼び鈴」などで使っているが）、普段あまり意識されていない音なので読みにくいということは考えられる。

以上より、①普段なじみのない読み方（音・訓）、②上略、は読みづらいということが言える。

8. 正訓＋略訓　9（10）

彩雲	小真	千晴	凪咲	夏海	七海	乃心	実夢	桃望
あやも	こまこ	ちはる	なぎさ	なつみ	ななみ	のこ	みゆ	ももみ

上略の例は、「彩雲（あやも）」の「雲（くも→も）」、「夏海（なつみ）」「七海（ななみ）」の「海（うみ→み）」、「桃望（ももみ）」の「望（のぞみ→み）」である。一方、単語の後ろを略す（「下略」という）ものは、「小真（こまこ）」の「真（まこと→まこ）」、「凪咲（なぎさ）」の「咲（さく→さ）」、「乃心（のこ）」の「心（こころ→こ）」、「実夢（みゆ）」の「夢（ゆめ→ゆ）」である。「千晴（ちはる）」の「晴（はれる→はる）」は、単語の中を略（「中略」という）したものと考えて、ここに分類した[4)]。

9. 略音＋正音　10

英美	永莉	彩衣	蒼良	万智
エミ	エリ	サエ	ソラ	マチ
優衣	悠那	悠麻	凛音	澪南
ユイ	ユナ	ユマ	リオン	レナン

「英」や「永」、「悠」、「優」など長音を下略しているのはそれほど読みづらさを感じない。「衣」という字だが、「彩衣」では（エ）と読み、「優衣」では（イ）と読んでいる。「衣」の常音は（イ）であるが（エ）と読むのはない。これは古い読み方である。「法衣（ホウエ）」などに残っている。

10. 略音＋正訓　6

杏早	安澄	愛純	南緒	万実	佑心
アズさ	アずみ	アずみ	ナお	マみ	ユみ

「杏早（アズさ)」の「杏（アンズ)[5]」を（アズ）と中略で読んでいるところ、さらに「早」を（さ）と読むことは少ないので読みづらさを感じる[6]。「佑心（ユみ)」の「心」を（み）と読むことの説明は先に述べた。

11. 略訓＋正音　18

明里	梓美	歩夏	咲季	栞梨	涼夏
あかリ	あずミ	あゆカ	さキ	しおリ	すずカ
和奈	光里	瞳那	愛奈	愛弥	恵美
なナ	ひかリ	ひナ	まナ	まミ	めぐミ
萌恵	萌衣	萌花	結衣	夕起	幸奈
もエ	もエ	もカ	ゆイ	ゆキ	ゆきナ

「明里（あかリ)」「咲季（さキ)」「栞梨（しおリ)」「光里（ひかリ)」「恵美（めぐミ)」「愛奈（まナ)」「萌恵（もエ)」「結衣（ゆイ)」などは「明（あかり→あか)」「咲（さく→さ)」「栞（しおり→しお)」「光（ひかり→ひか)」「恵（めぐみ→めぐ)」「愛（まな→ま)」「萌（もえる→も)」「結（ゆう→ゆ)」の略訓にそれぞれ「里（リ)」「季（キ)」「梨（リ)」「美（ミ)」「奈（ナ)」「恵（エ)」「衣（イ)」の正音が付け加わったと見て、ここに分類した。しかし、これらの名前は「明（あかり)」「咲（さき)」（活用）「栞（しおり)」「光（ひかり)」「恵（めぐみ)」「愛（まな)」「萌（もえ)」「結（ゆい)」（活用）という風に一文字だけでも響きとしては読むことができる。よって「里」「季」「梨」「美」「奈」「恵」「衣」は、音も表す〈添え字〉である。

「和奈（なナ)」の「和（な)」は（なごむ）の省略だが名前で「和」を（な）と読むことは少ないので読みづらさを感じる。

「萌衣（もエ)」の「衣（エ)」という読み方や「幸奈（ゆきナ)」の「幸（ゆき)」という読み方については先に述べた。

12. 略訓＋正訓　5（6）

桂月	姫菜	円香	愛菜	海琴
かづき	ひな	まどか	まな	みこと

やはり略訓の部分が読みにくいのではないだろうか。「桂月（かづき)」の「桂（かつら)」を（か）と読んだり、「姫（ひめ)」を（ひ)、と読むような場合である。「海」を「み」と略して読むのはすでに見てきた。

また、「円香（まどか)」「愛菜（まな)」などは、「円（まどか→まど)」「愛（まな→ま)」の略訓にそれぞれ「香（か)」「菜（な)」の正訓が付け加わったと見て、ここに分類したが、これらの名前は「円」（まどか)、「愛」（まな）という風に一文字だけでも響きとしては読むことができる。よって「香」や「菜」は〈添え字〉である。

13. 略音＋略音　2

杏優	凛音
アユ	リン

「杏優（アユ)」は「杏（アン)」「優（ユウ)」の略音の組み合わせである。後の撥音や長音が省略されているだけなので、さほどむずかしい読み方ではない。「凛音（リン)」だが、（リン）という読み方は「凛」の一文字だけでも読むことができる。よって「音」は〈添え字〉とみられる。

14. 略音＋略訓　1

優和
ユな

「優（ユウ→ユ)」の略音と「和（なごむ→な)」の略訓である。前者は長音の省略だが、後者は略す音が多くて読みにくい。

15. 略訓＋略音　3

虹香	望愛	愛桜
にコ	のア	まオ

「桜」を（オ）と読むのに読みづらさを感じるということは先に述べている。「虹香（にコ）」という名前は「虹」という字を訓（にじ）で読む名前は珍しい上に下略しており、さらに「香」も（コウ）という読み方は名前には少ない。なので、「虹香（にコ）」はかなり読みづらい。「望」を（の）と読むのは（のぞ・む）の下略で略す音が多いので読みづらい。

16. 略訓＋略訓　4

涼楓	紗夏	碧海	望結
すずか	すずな	みう	みゆ

略訓＋略訓はすんなり読めないものばかりである。「涼楓（すずか）」の「楓（かえで→か）」、「碧海（みう）」の「碧（みどり→み）」、「望結（みゆ）」の「望（のぞみ→み）」は二音節の読みを省略しているためとても読みづらさを感じる。特に「望（み）」という読みは（のぞ・み）の上略のため読みにくい。「紗（すず）」は「すずし（精錬していない生糸で織った軽くて薄い布）」の下略。「夏（な）」は（なつ）の下略である。

ここから後は、正訓に近いが、字義と関連する語で読む「義訓」が入ってくるものを集めた。義訓は名乗りとしては長い歴史を持っているものも多いが、常訓にはないので読みづらいものである。

17. 正訓＋義訓　1

実生
みみ

「生」には「いきる・いかす・いける・うまれる・うむ・おう・はえる・はやす・き・なま」などの常訓のほかに、「いきもの・しごと・一生・捕虜・熟していない・実ができる・作り出す・そだてる」など多くの字義がある。名乗り訓の「み」も「実がなる」という意味から「み」という読みが生じたのではないだろうか。よって「生（み）」を義訓としておく。

18. 義訓＋正音　1

朱夏
あやカ

「朱」を（あや）と読むのは義訓と考え、ここに分類した。「朱（あか・あけ）」は正訓だが、そのような鮮やかな赤色をつかった織物＝綾（あや）に通じるということかもしれないが、これは推測の域をでない。

19. 義訓＋正訓　2

温菜	童葉
はるな	わかは

「温」を（はる）、「童」を（わか）と読むのは義訓と見られる。義訓を使った名前は読みづらい。

20. 義訓＋略訓　2

陽咲	萌叶
はるき	ほのか

「萌」は常用漢字表に入っていない文字だが、名前には好まれているようですでに別の項目でもこの字について述べた。字義は「め・もえる・きざす」などであり、「ほのか」はそれらとの関連語と考え、一応ここに分類しておく。

「陽咲」の「陽」は常用漢字表では音（ヨウ）のみの文字である。字義には「ひ・ひなた・あたたかい・あきらか・表面・いつわる・陰陽の陽・生者」などがあり、名乗りにも「はる」など多くのものがある。「はる」は「あたたかい」という字義から来た義訓と考えられる。また「咲」を

（き）と読ませているのは、「咲き」の上略である。「咲」を（さく）ではなく、連用形（さき）で読ませてなおかつ上略させているので、なかなか読めない読み方になっている。

21. 義訓＋略音　1

暖来
ゆらラ

「暖」の常訓は「あたたかい・あたたまる」などで、そこから「はる・あつ・やす」などの名乗り読みもあるようである。「ゆら」という名乗りはないようだが、「あたたかい→ゆら（ゆら）」という発想の義訓とみなした。「暖来」の（ラ）は（ライ）の下略である。

22. 義訓（熟字訓）　2

日和	吹雪
ひより	ふぶき

今までの義訓は漢字一文字についてのものだったが、ここに分類したものは、いわゆる「熟字訓」と呼ばれているもので、二字（あるいはそれ以上）の漢字全体に一つの訓が与えられているものである。

23. 未分類　3

向葵	咲季	優咲
あおい	さり	ユら

ここに分類したのは、音訓の範疇に入らないものである。「向葵（あおい）」は「葵」だけでも（あおい）と読める。「向」は〈添え字〉だと考えられるが、「向」は音訓では分類できない。「咲」を（さ）と読むのは訓（さく）の略訓だが、「季」は（り）とは読めない。また、「優」を（ユ）と読むのは音（ユウ）の略音だが、「咲」を（ら）と読むことはできない。特に最後の二つのように、対応する音訓を全く見いだせないものがある。これらは難読中の難読というべきだろう。

ま と め

表にまとめて、読みにくさという観点から調査を続けた。読みにくさにはいくつかの原因があることがわかった。

一つ目は、音や訓を略していると読みづらさが増すということである。さらに音や訓の上の部分を略している（例：市を「ち」と読む）上略と、下の部分を略している（例：優を「ゆ」と読む）下略があり、上略は更に読みづらさを感じることが多くなる。さらに二音節以上の読みを省略しているともっと読みづらさを感じる。

二つ目は、常用漢字表に掲載されていない訓は読みにくいということである。小学校や中学校で漢字を習う際に学ぶ訓は制限されていて、学校で学ぶ漢字の訓はその漢字の意味の一部である。名乗りや古訓などの特殊な読みは常用漢字表には無いものが多く、使われることが少ないため、読みづらい原因になっている。

三つ目は常用漢字表に採られていない漢字をつかった場合（たとえば「萌」など）、その音訓になじみがないので読みづらいということがあげられる。

四つ目は訛化や添音、連声、唐音、ハ行転呼音など特殊な読み方をするものである。これらは普段の会話では何気なく使われていることもあるが名前に使われると読みづらさの原因となる。

以上の原因により、例え小学校や中学校で漢字を学んでも読みを知らなかったりして読みづらさを感じたり、読めなかったりするのである。これらが名前に読みにくさを感じる主なポイントであると考えられた。

注

1）連声とは「二つの語が連接するときに生ずる音韻上の変化。（略）日本語については、通例、ア・ヤ

・ワ三行の音を頭音節にもつ語が、m・n または t を末尾にもつ字音語のあとに連続するとき、その頭音がマ・ナ行またはタ行の音に転ずるものをいう」(『日本国語大辞典』)。同辞書は「因縁（いんねん)」「三位（さんみ)」などの例を挙げている。

2）唐音とは「日本の漢字音の一つ。平安中期から江戸末期までに日本に伝来した中国語の発音の総称。唐宋音。「行灯（あんどん)」「蒲団（ふとん)」「普請（ふしん)」などの類」(『明鏡国語辞典』）を言う。

3）ハ行転呼音とは歴史的仮名遣いにおいて、語中・語尾のハ行の仮名がその本来の発音から転じてワ行音に発音されること。また、その音。それが顕著になるのは十世紀以降のこと（『大辞林　三省堂』)。同辞書は「かは（川)」をカワ、「おもふ（思)」をオモウなどの例を挙げている。

4）「晴（はる)」は古語とも考えられる。

5）「杏」は（アン）で、（アンズ）は「杏子」だが、ここでは「杏」だけで（アンズ）とよませている。

6）「早苗（さなえ)」「早乙女（さおとめ)」など、熟語の時は、「早（さ)」とよむ。

参考文献

『学研　漢和大字典』
『大辞林　三省堂』（パソコン辞書検索　国語辞書）
『精選日本国語大辞典』（電子辞書　カシオ EXword）
『明鏡国語辞典』（同上）
稲岡耕二（1979)「万葉集の用字」『万葉集必携』学燈社
徳田克己（2004)「子どもの名前のつけ方に関する研究－読みにくい名前、読み間違えられる名前を中心にして」『読書の科学』48 巻 3 号
佐藤稔（2007)『読みにくい名前はなぜ増えたか』（歴史文化ライブラリー 236）吉川弘文館
「漢字辞典ネット」http : //www.kanjijiten.net/